法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-06

能界展望(平成十四年)

山中, 玲子

(出版者 / Publisher)
法政大学能楽研究所 / The Nogami Memorial Noh Theatre Research Institute of Hosei University
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
能楽研究 / 能楽研究
(巻 / Volume)
28
(開始ページ / Start Page)
133
(終了ページ / End Page)
141
(発行年 / Year)
2004-04-10
(URL)
https://doi.org/10.15002/00002859

Hosei University Repository

能界展望（平成十四年）

山中玲子

はじめに

平成13年12月7日、文化芸術振興基本法が施行された。「二十一世紀を迎えた今、これまで培われてきた伝統的な文化芸術を継承し、発展させるとともに、独創性のある新たな文化芸術の創造を促進することは、我々に課された緊要な課題となっている」（前文）との認識のもと「文化芸術活動を行う者の自主性を尊重することを旨としつつ、文化芸術を国民の身近なものとし、それを尊重し大切にするよう包括的に施策を推進していく」（同前）ことをめざしたもので、文化芸術の振興にあたっての基本理念や基本的施策、それを推進するための国・地方公共団体・民間の役割等を定めている。14年にはこれを受けて、「文化芸術の振興に対する基本的な方針」閣議決定もなされた。法律が一つできたからといって、急に何かが変わるわけでもないだろうが、ここで取り上げられている様々な問題の中には、伝統の継承、後継者の養成、地方での上演機会、学校教育との関わり、国際交流、著作権や肖像権等々、能楽界がこれから真剣に取り組んでいかねばならない事柄も多く含まれている。能楽が現代に生きる芸術として本当の意味で発展していけるような方向を目指し、ひきつづき、活発な議論が重ねられることを望みたい。

平成14年は、テレビのワイド・ショーや週刊誌を騒がせるような出来事もありはしたが、全体としてはここ数年来の動向と大きく変わることもなく過ぎた一年と言えるだろう。以下、記録を中心にこの年の能楽界の概要を述べるが、すべての催しを把握することはできないので、限られた事柄だけを述べる形になること、また、敬称は原則的に省略させて頂いたことを、初めにおことわりしておく。

さまざまな催し

本年も数え切れないほど多くの催しがあった。以下には特に話題になったものを取り上げる。本稿の性質上、通常とは違う「変わった催し」が中心になってしまうが、他にも地道な努力を重ねて質の高い舞台成果を挙げている活動が多数あることは言うまでもない。それらの活動や成果については、諸誌に掲載の能評記事等を参照されたい。

【記念能】

1月7日には、能楽がユネスコにより「人類の口承及び無

Hosei University Repository

形遺産の傑作」として宣言されたことを記念する会が、国立能楽堂であり、能〈葵上〉(片山九郎右衛門)、狂言〈千鳥〉(茂山千作・野村萬)をはじめ、一管・一調・仕舞等が演じられた。

本年は、戦災で焼けた矢来能楽堂の再建(昭和27年)から五十周年にあたり、4月12日～14日の3日間、「日賀寿能」が催された。初日は観世清和の翁、二日目は観世喜之の翁で始まり、九皐会のメンバーによる能六番(〈石橋〉の半能も含む)の他、狂言三番、各流の家元等による一調・囃子等の上演があった。九皐会ではこれに合わせ『矢来能楽堂再建五十周年記念　観世九皐会の歩み』と題する、総240頁の記念誌を刊行しているが、めずらしい写真や詳しい年表、座談・対談の記録など、九皐会だけでなく戦後の能の歴史そのものを伝えてくれる貴重な資料となっている。

法政大学能楽研究所は創立五十周年、武蔵野女子大学能楽資料センターは創立三十周年をそれぞれ迎え、記念に能の公演を行った。能楽資料センターの記念公演は、11月21日。同大学雪頂講堂で、土岐善麿作の〈実朝〉(塩津哲生)が上演された。能楽研究所では新作能の〈草枕〉を上演した(別掲の五十周年記念行事報告記事参照)。また、地方では滋賀県の浅井能楽資料館が、3月21日、開館十周年記念能〈羽衣〉、〈福の神〉ほか)を催している。

【復曲・新作など】

この年も、新作・復曲活動は盛んに行われ、多くの作品が初演・再演された。こうした活動自体は、すでに日常化した感があるが、その中で、原爆をテーマにした「サダコ」、水俣の問題を取り上げた「不知火」等、はっきりとしたメッセージを放つ作品が演じられたことを、14年の特徴として記しておきたい。また復曲に関しては、従来のようにテキストを古い形に復元するだけでなく、それを演じる技法そのものも復元する試みが行われた。ここ数年「新作・復曲は日常茶飯事」というようなコメントが繰り返され、玉石混淆を言う声も多くあったと思うが、そのような積み重ねが十数年続いて各方面に浸透すると、こうしてまた新しい試みが生まれてくるものなのだなと、感慨を新たにしたことである。以下、主な催しを掲げる。

◎復元能〈卒都婆小町〉

11月9日。横浜能楽堂企画公演。昼夜二部構成で、昼の部は通常の〈卒都婆小町〉、夜の部は、桃山時代の旋律やリズムに基づく復元能を、同一の役者たちが演じた。節付のない科白の部分も当時のアクセントに合わせて発音し、装束も当時の柄や色調を復元したものを用いるなど徹底しており、現代の能とはまったく別の芸能に思えるほど印象の違う〈卒都婆小町〉となった。監修、竹本幹夫・高桑いづみ・坂本清恵・山口憲。出演、山本順之・宝生欣哉・殿田謙吉。松田弘之・大倉源治郎・柿原崇志。阿部信之・西村高夫・岡田麗史・柴田稔・小野里修・馬野正基・浅見慈一。観世銕之丞・清水寛二。

Hosei University Repository

◎大阪天満宮「寄進御能」復曲能〈菅丞相〉

4月26日。大阪天満宮特設能舞台。主催＝大阪天満宮御神退千百年大祭奉賛会。寄進御能の興行は一五〇年ぶり。協賛＝能楽協会大阪支部・大槻清韻会能楽堂。演出・節附・型附＝大槻文蔵。監修＝天野文雄。出演は、大槻文蔵・山本章弘・福王茂十郎・赤井啓三・清水晧祐・山本哲也・上田悟ほか。

◎新作能〈鞆のむろの木〉

6月15日。国立能楽堂。舞台は広島県鞆の浦、江戸時代の儒者菅茶山の前に万葉の歌人大伴旅人の霊が現れる、複式夢幻能。帆足正規作。大島政允節付・型付。出演は、大島政允（シテ）・大島衣恵（ツレ）・香川靖嗣（地頭）・安田登・松本薫・帆足正規・久田舜一郎・亀井広忠・助川治ほか。

◎新作能〈不知火〉

7月14日、宝生能楽堂。7月18日、国立能楽堂。橋の会第69回公演。石牟礼道子作・梅若六郎節付・笠井賢一演出。水俣病の問題に深く関わってきた石牟礼道子が初めて書いた、不知火の海を舞台にした能。出演は、梅若六郎・櫻間金記・観世銕之丞・梅若晋矢。藤田六郎兵衛・大倉源次郎・亀井忠雄・助川治。コロス＝角当行雄・赤瀬雅則・会田昇・山崎正道・角当直隆・馬野正基・山中迓晶・松山隆之。地謡＝山本順之・西村高夫・岡田麗史・梅若靖記・松山隆雄・柴田稔・小田切康陽・井上燎治。

◎新作能〈サダコ―原爆の子　〉（広島公演）

10月11日。広島市、アステールプラザ中ホール。13年東京で初演。被爆による白血病のため12歳で亡くなった佐々木禎子の物語。広島放送局制作のドキュメンタリーに心を動かされて、堂本正樹が創作。梅若晋矢作曲・演出、小田幸子ドラマトゥルグ、梅若六郎監修。広島上演実行委員会が中心になり、広島県教育委員会、広島市教育委員会ほか、文化財団や放送局等、多くの後援を得ての上演。出演は、梅若晋矢（前シテ・サダコの化身、後シテ・鶴になったサダコ）、ダン・ケニー（ワキ・異邦の旅人）、野村小三郎（アイ・ガイド）、梅若六郎（地頭）、松田弘之、横山貴俊、白坂信行、小寺真佐人ほか。

◎新作能〈草枕〉

11月15・16日。法政大学ボアソナードタワー26階スカイホール。法政大学能楽研究所創立五十周年記念公演。出演は浅見真州・観世銕之丞ほか（詳細は別掲の五十周年記念行事に関する報告を参照）。

◎新作・能舞〈水底の感〉

7月18日。東京晴海トリトンスクエア第一生命ホール。松下功作曲作品のコンサート「松下功―人として五十年」の中で、野村四郎が演じた。夏目漱石作、野村四郎節付・作舞、笠井賢一構成・演出。

◎新作狂言〈かぐや姫〉

9月23日。宝生能楽堂。野村与十郎の回。脚本、嶋影海比是。出演は、野村与十郎・野村万禄・小笠原匡・野村晶人・

Hosei University Repository

山下浩一郎ほか。

◎新作狂言〈養毛の仙人〉

10月10日。静岡文化芸術大学「出会いの広場」。脚本、安藤楼蘭。脚本参与、左口歩。演出・主演は井上祐一。

◎現代能〈ベルナルダ・アルバの家〉

2月23日、テアトルフォンテ。3月6日、横浜能楽堂。錬肉工房（岡本章主宰）と横浜能楽堂の共催。脚本＝ガルシア・ロルカ、水原紫苑。構成・演出＝岡本章。出演は観世榮夫・山本順之・櫻間金記・新井純・鈴木理江子・千賀ゆう子ほか。

◎新作能〈海月望郷〉

1月23日、アートスフィア。11月2日、喜多能楽堂。阿倍仲麻呂の物語。能の技法と、中国楽器・薩摩琵琶・中国語の詩の朗詠等を組み合わせた作品。林望作。津村禮次郎節付・型付。出演は津村禮次郎・中所宜夫・安田登・内潟慶三・古賀裕己（1月）・幸信吾（11月）・髙野彰・吉谷潔ほか。

【海外との交流・海外公演など】

◎韓日国民交流記念の会

1月28日。東京国立劇場小劇場。韓国大使館と文化庁共催の『韓日国民交流の年　開幕式・記念公演』で、日本の芸能として、狂言〈首引〉（山本東次郎ほか）が演じられた。

◎日韓古典芸能祭２００２

8月4日。横浜能楽堂。二〇〇〇年から続いている日韓の古典芸能の交流。本年は「祈り」をテーマとし、沖縄復帰三十周年を記念して琉球舞踊の宮城能鳳も「伊野波節」で出演。素囃子「神舞」、狂言〈福部の神―勤人〉（山本東次郎ほか）。韓国からも、宮中舞踊、歌曲、作法舞等、様々な芸能が披露された。

◎インド四大都市での能楽セミナー

国際交流基金による能のセミナーとワークショップ。8月12日～22日。ニューデリー、ムンバイ、チェンナイ、コルカタの各都市の、大学や学校のホール等を利用して行われた。講演・解説＝松田存。実演＝岡本房雄・田辺哲久・北館憲二。

◎ＮＹテロ一周年、追悼公演

二〇〇二年9月11日の同時テロから一周年を記念し、梅若六郎を団長とする一行（梅若六郎、梅若晋矢、角当直隆、梅若靖記、髙井松男、則久英志、山本東次郎、山本則重、山本則秀、竹市学、大倉源次郎、亀井広忠、助川治ほか）がニューヨークで追悼公演を行った。8月31日、〈瓜盗人〉〈土蜘蛛〉。9月1日、〈二人大名〉〈葵上〉。成田山新勝寺の僧侶20名も同行、両日とも初めに声明、最後に声明と能の囃子による能舞「INORI」が捧げられた。

◎ヨーロッパでの〈阿倍晴明〉公演

ニューヨークで追悼公演を行った一行の大部分が、ヨーロッパへ回り、フランスのオータン市立劇場（9月5日）と、ブリュッセルの王立歴史美術博物館（9月8日）、オランダのアルクマール・デ・フェスト劇場（9月9日）で、現代能〈安倍晴明〉を上演した。途中、6日には、パリの日本大使館公邸で〈羽衣〉の上演も行っている。

Hosei University Repository

◎日中国交正常化三十周年記念、白翔会観世流薪能北京公演

9月26～29日。日中国交正常化三十周年を記念し、両国の伝統芸術・文化の交流をめざす催し。日本からは白翔会演能団（坂井音重＝団長、観世恭秀、武田志房、村瀬純、山本東次郎、寺井宏明、鵜澤速雄、柿原崇志、大江照夫ほか、総勢27名）が参加。中国側からは京劇・昆曲が同時上演された。26日＝北京市釣魚台国賓館。〈石橋・大獅子〉〈呼声〉、昆曲「遊園驚夢」、京劇「貴妃酔酒」。28日＝故宮大廟の仮設舞台。〈羽衣・和合之舞〉〈皇〉、昆曲「長生殿・小宴」、京劇「覇王別姫」。29日＝同所。〈土蜘蛛・入道之伝〉〈寝音曲〉、昆曲「痴夢」、京劇「貴妃酔酒」。

【講座・展覧会など】

能装束・能面の展覧会、能の普及をめざす講座等は、ますます盛んである。展覧会で美しい装束や面を見て感動し、実際に舞台の上で使われるところを見てみたいと思ってくれたり、講座を聴くことで、能楽に対して感じる敷居の高さがなくなり、気軽に能楽堂へ足を運んでもらえたりすれば、能の普及のためにはとても良いことだと思うが、実際はなかなか、観客人口の増加には結びつかないようだ。それでもやはり、興味を持ってもらうための入り口の一つとして、地道な努力を重ねていくことが大切なのだろう。以下、全体のごく一部だが、目についたものを挙げる。

◎根津美術館開館六十周年記念名品展「能面と能装束」

1月12日～2月17日。同美術館開館六十周年記念展の第八部。桃山・江戸時代の能面・能装束と、当時、日常生活で着られていた小袖を併せて展示。「能装束―その変遷と流転―」（長崎巌）と題する講演や、能装束の着付の実演（梅若萬三郎）も行われた。

◎京の町屋での「謡講」

前年に始まった、京都の伝統的な町屋で謡を楽しもうという試みが好評のため、本年も2月と11月に行われた。2月16日は、幕末に新撰組屯所が置かれたという中京区の八木家住宅で、〈弱法師〉〈巴〉。11月9日は、下京区の「奈良屋」杉本家の座敷で、〈雨月〉〈三輪〉。ともに、一般公募の替謡も披露された。出演は、井上裕久、味方玄、吉浪寿晃、浦部幸裕、橋本光史。

◎ビクトリア＆アルバート美術館能装束と能面展

これは外国での展示。2月20日～3月31日。ロンドンのビクトリア＆アルバート美術館。JAPAN 2001の企画の一つ。京都の装束師、山口安次郎・山口滋の袷狩衣「牡丹三階松文様」や唐織「奥嵯峨野文様」等14作品と、神戸の能面師、鈴木能仁作の能面11面を出品。

◎足利市立美術館「能装束の美　華麗なる世界」展

9月7日～10月27日。江戸時代の能装束と復原された装束、能面を加えた約160点の展示。また関連事業として山口能装束研究所の山口憲による記念講演会や列品解説、能楽師による装束付けと演能、ワークショップなどが企画された。

Hosei University Repository

◎国立能楽堂特別展示「浮世絵に見る能」
10月2日～30日。「主題に因む受容と変貌」という副題で、能楽に関わる主題が庶民に愛好された浮世絵にどのように受け入れられていたかを紹介。列品講座は「浮世絵と能」（木村八重子）。

◎文化学園服飾博物館特別展「能装束と役柄」
11月22日まで。井伊家旧蔵の品を中心とした同館所蔵の能装束約60点を展示。男・女・神・鬼などそれぞれの役柄に応じた装束を紹介。

◎法政大学能楽研究所創立五十周年記念展と能楽セミナー
（別掲の五十周年記念行事に関する報告を参照）。

◎武蔵野女子大学能楽資料センター公開講座
開設三十周年記念行事の一つ。同大学グリーンホール。6月20日「現代における能の演出」（小田幸子）、7月11日「英語能の実践」（リチャード・エマート）、10月17日「新作・復曲・課題曲」（梅若六郎）、11月14日「新作能の作者」（馬場あき子）。

◎鎌倉芸術館能講座
7月3日・10月11日。鎌倉芸術館。同館の能楽公演・伊勢物語シリーズⅡ〈雲林院〉（梅若万三郎）、Ⅲ〈杜若〉（塩津哲生）の事前講座。講師は各回とも馬場あき子。テーマは順に「高子后と業平」「もの語る杜若」。

襲名・改名など

観世流分家当主観世暁夫は、1月1日付で九世観世銕之丞を襲名し、それにともない八世観世銕之亟の諡号を静雪とした。また京観世五軒家の流れを汲む井上家の当主井上嘉久は、2月5日、九世井上嘉介を襲名した。梅若研能会の水野泰志は梅若千佐子氏との結婚に伴い梅若泰志に改姓した。
狂言方和泉流の和泉元彌は、10月21日付で、能楽協会を退会した。

栄誉・受賞

◎重要無形文化財各個指定保持者（人間国宝）
大鼓方葛野流、亀井忠雄。
6月21日、文化審議会が12名の追加認定を文部科学大臣に答申し、認定された。亀井氏は、昭和16年12月1日、亀井俊雄の次男として東京に生まれ、父および川崎九淵、吉見嘉樹に師事。初舞台は昭和24年の〈熊野〉。平成6年観世寿夫記念法政大学能楽賞受賞。平成10年より、葛野流宗家預かり。

◎芸術院新会員　ワキ方下掛宝生流、宝生閑。
12月2日、日本芸術院は8名の新会員を発表した。宝生氏は、昭和9年5月15日、宝生弥一の長男として生まれ、父および祖父の宝生新に師事。初舞台は昭和16年の〈葵上〉。平成6年、重要無形文化財各個指定保持者（人間国宝）。平成13年に、十二世宗家を継承。

◎春の叙勲（4月29日）
シテ方観世流、木原康夫。勲五等双光旭日章。

Hosei University Repository

◎日本芸術院賞（平成13年度）　シテ方観世流、関根祥六。
受賞理由：真摯に舞台に取り組み高い水準の芸を伝承し、また国立能楽堂能楽研修の主任講師を務めるなど後進の育成に尽力し、能楽界への業績は顕著である。

◎芸術選奨（平成13年度）　ワキ方福王流、福王茂十郎。
平成13年2月18日、観世文庫設立十周年記念能〈泰山木〉の演技によって、文部科学大臣賞を受賞。

◎秋の褒章（11月2日）
シテ方観世流、大槻文蔵。紫綬褒章受章。

◎秋の叙勲（11月3日）
シテ方金春流、高橋汎。勲五等双光旭日章。
太鼓方観世流宗家、観世元信。勲五等双光旭日章。

◎早稲田大学芸術功労者賞　狂言方和泉流、野村万作。
狂言界の旗手としての高い評価に加え、同大学演劇博物館企画・制作の狂言DVDの監修・出演により「多数のすぐれた舞台映像を収録し、古典芸能の世界に大きな足跡を残した」ことによる。

◎大阪文化祭奨励賞　森田流笛方、野口亮。
「亮の会」の〈望月〉で「打楽器にも負けない激しいリズム感、強弱のメリハリを表現し得た」として。

◎第24回観世寿夫記念法政大学能楽賞（別記彙報参照）
小鼓方幸流、横山貴俊。能楽研究者、三宅晶子。

◎第14回催花賞（別記彙報参照）
能楽研究者、小鼓方幸流、故・田中允。

日本能楽会・能楽協会関係

◎日本能楽会

【役員構成】

〈会長〉　金春惣右衛門

〈常務理事〉　観世清和　野村四郎　金春安明　宝生英照　金剛永謹　喜多六平太　宝生閑　茂山千之丞

〈理事〉　井上嘉久　大槻文蔵　高橋汎　近藤乾之助　佐野萌　広田陛一　大島久見　福王茂十郎　一噌仙幸　寺井久八郎　幸清次郎　宮増純三　亀井忠雄　山本孝　観世元信　井上祐一

〈監事〉　高橋章　一噌庸二

【会員数】（平成十四年十二月十日現在）総数　443名

シテ方	観世193	金春12	宝生49	金剛11	喜多27			小計292
ワキ方	高安6	福王6	宝生8					小計20
笛方	一噌6	森田16	藤田1					小計23
小鼓方	幸11	幸清6	大倉8	観世1				小計26
大鼓方	葛野8	高安5	石井7	大倉5	観世1			小計26
太鼓方	観世6	金春11						小計17
狂言方	大蔵26	和泉12						小計38

Hosei University Repository

◎能楽協会

【役員構成】

〈理事長〉 片山九郎右衛門

〈常務理事〉 梅若六郎　坂井音重　武田志房　寺井良雄　香川靖嗣　宝生閑　鵜澤速雄　柿原崇志　山本則俊

〈理事〉 浅見真州　桜間貞理　亀井保雄　松野恭憲　廣田泰三　出雲康雅　福王茂十郎　藤田六郎兵衛　三島元太郎　亀井俊一　野村万之丞

〈理事・東京支部長〉 武田宗和

〈理事・名古屋支部長〉 福井啓次郎

〈理事・北陸支部長〉 渡邊容之助

〈理事・京都支部長〉 片山慶次郎

〈理事・大阪支部長〉 大槻文蔵

〈理事・神戸支部長〉 藤井徳三

〈理事・九州支部長〉 鷹尾祥史

〈理事・事務局長〉 瀬山栄一

〈監事〉 粟谷菊生　丸岡圭一

【会員数】 1546名

支部別　東京　683名　名古屋　115名　北陸　95名
京都　176名　大阪　218名　神戸　57名
九州　150名　本部扱　52名

物故者

●徳野　秀男氏

観世流師範。1月6日、肝臓疾患のため逝去。享年73。

●松野　秀世氏

日本画家。2月13日、くも膜下出血のため逝去。享年65。日本画家であり能楽研究家でもあった松野奏風の次男。昭和35年東京芸術大学日本画科卒業。観世能楽堂、名古屋能楽堂、こしがや能楽堂等の鏡板の松を描いている。厳島神社能舞台の復元にも尽力した。

●宝生　哲氏

ワキ方、下掛宝生流十一世宗家。3月14日、呼吸不全のため千葉県柏市の病院で逝去。享年79。大正12年7月30日、十世宝生新の次男として生まれる。前名彰彦。戦後すぐに宗家を継承した。

●金春　晃實氏

シテ方金春流。4月3日、腎不全のため奈良市の高の原中央病院で逝去。享年70。昭和6年8月3日、七七世金春栄治郎の長男として生まれ、父に師事。五歳の時、〈船弁慶〉の子方で初舞台。奈良・大阪を中心に活躍した。日本能楽会会員（昭和47年以来）。

●櫻間　寿美子氏

故櫻間金太郎夫人、櫻間貞理氏の母。6月17日、リンパ腫のため逝去。享年80。

●観世　寿弥氏

七世故観世銕之丞雅雪夫人。6月26日、肺癌のため青山銕仙会の自宅で逝去。享年93。明治41年11月12日生まれ。本名

Hosei University Repository

千栄子。明治45年、六世銕之丞華雪の養女となり、大正13年に七世銕之丞（織雄）と結婚。寿夫・榮夫・静夫（八世銕之丞）三兄弟の母として、銕之丞家を支えた。

●國枝　良三郎氏

観世流準職分。日本能楽会会員。9月15日、急性肺炎のため、大阪市中央区の大手前病院で逝去。享年75。昭和2年5月6日生まれ。佐野光太郎および生一左兵衛に師事。日本能楽会会員（昭和57年以来）。

●宝生　裕子氏

宝生流十九世宗家、宝生英照氏夫人。9月26日未明、急性心不全のため逝去。享年43。

●穂高　光晴（本名・田中允）氏

幸流小鼓方、能楽研究家。10月1日、心不全のため逝去。享年88。大正2年11月28日生まれ。幸祥光に師事し、幸流小鼓方として活躍する一方、法政大学文学部助教授、同能楽研究所専任所員、青山学院大学文学部教授等を歴任。早くから廃絶謡曲の研究に取り組み、その成果を『未刊謡曲集』にまとめた。他の著書に、朝日日本古典全書『謡曲集』、『校本四座役者目録』、『近代能楽諸家列傳』等がある。新作能（世阿弥再見）を作、初演。日本能楽会会員（昭和42年以来）。平成14年度「催花賞」受賞。

●檜　常太郎氏

観世流・金剛流宗家本発行元、檜書店元社主。10月30日、肺炎のため、東京文京区の順天堂大学病院で逝去。享年93。明治42年1月15日、檜書店二代目檜常之助の長男として生まれる。観世流大成版の刊行（昭和14～18年）、雑誌『観世』の発行等の本業の他、昭和29年の三役養成会（後の能楽養成会）発足以来、理事として能楽師の後継者育成にも尽力した。昭和63年勲四等旭日小綬章を受章。平成12年度「催花賞」受賞。